

学部・研究科名 応用生物科学研究科（農学研究科）
学部長・研究科委員長名 山本 祐司 （上原 万里子）
学科名・専攻名 農芸化学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論・演習・実験科目のほか、分野横断的な選択科目（生体機能化学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。	大学院生への教育・研究支援は、所属研究室におけるセミナー、個別指導などを通じて手厚く行っている。	学生の研究活動、講義科目の成績、発表会などから総合的に評価している。	所属研究室における定期的なセミナー、専攻全体での中間発表会、および最終発表会などを通じ、継続的に学習成果を把握している。	評価アンケートの結果や各研究室の現状、教員間で共有し、会議の場で議論するとともに、継続的な改善に努めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 最新の知見や研究手法のインプットから研究発表によるアウトプットまでを総合的に身に付けさせることができる。	【長所】 研究室教員と各院生間で定期的にディスカッションをしており、研究だけでなく生活面のサポートも可能である。	【長所】 なし	【長所】 専攻全体での発表会では、他分野の教員との議論も加わり、研究課題に対するより本質的な理解につながる。	【長所】 なし
	【特色】 外部講師による講義も豊富で、学外の情報を積極的に取り入れられる。	【特色】 研究室規模が比較的大きく、学生間での情報共有や切磋琢磨する機会にも恵まれている。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻3ポリシー			中間発表会（資料A）、および最終発表会（資料B）実施記録、◆専攻3ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、農芸化学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康に関わる課題解決に取り組むことができる学生を求めている。大学院進学後に必要となる学力を評価するため、英語と農芸化学基礎（生物化学及び有機化学、無機化学）を試験科目としている。これらの筆記試験に加え、大学院指導教授による口頭試問により評価している。合否判定については、会議において、厳正・公平な審査を行っている。2 期入試受験者に対しては、口頭試問において、卒論研究に関するプレゼンテーションを行うことで適正を測っている。	試験後の選考会議において、専攻の教員間で十分に議論し、学生選抜の適切性を担保できるよう努めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学力だけでなく、研究に対する意欲や卒業後の進路に対する考え方を含めて把握することができる。	【長所】 ・専攻全体で審査が行われるため、公正な点検、評価が期待できる。
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆大学院入試募集要項、HP 等、◆専攻 3 ポリシー	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各研究室に必要な人数の教員が在籍し、各教員の専門分野も専攻の専門性に沿っている。 採用時の面接で教育や研究に関する適正を測っている。	学内ルールに則り、教員の新規採用と昇任手続きを実施している。	FD セミナーなどに教員が積極的に参加している。	学科全教員もしくは大学院指導教授をメンバーとする会議体により、情報共有と意見聴取を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	学科（専攻）教員配置表（資料 C）	◆教務職員資格審査基準及び関連書類		

学部・研究科名 応用生物科学研究科（農学研究科）

学部長・研究科委員長名 山本 祐司（上原 万里子）

学科名・専攻名 醸造学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	醸造学専攻のカリキュラムポリシーに基づいて、醸造学にかかわる高度な研究者、教育者、専門家としての総合力を確立するために、特論科目、基礎科目、研究科目を配置している。	通常のポスター発表では十分な討論の時間を取りづらいが、コロナ対応として Microsoft Teams でポスター発表会会場を設営し、数日間をかけて閲覧者による質問、発表者による回答ができる形式とし、深い議論が行えた。	シラバスに明示されている各科目の評価基準に基づいて成績を評価し、単位を認定している。また、学位審査及び修了認定は最終プレゼンテーションと質疑の内容を踏まえて、専攻内全指導（准）教授による会議にて客観的かつ厳格に行っている	学生の学習成果は醸造学特別実習や特別研究科目を通じて各研究室において適切に把握し、評価している。また修士 2 年の中間発表会において他研究室の授業担当者からも評価を受けている。	必要に応じて専攻内教員の間で意見を交換し、教育課程の内容と方法の適切性を評価している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・オムニバス形式で実施する醸造学概論については、教員独自の高度な内容を含むようにしている。	【長所】 ・教員とのディスカッションを通じて、総合力を養っている。	【長所】 ・最終プレゼンテーションに対しては、学位授与に資するかの判断を念頭に活発な質疑が行われている。	【長所】 ・中間発表会においては、発表に対する質問へ回答させることで、より適切に学習成果を把握及び評価できている。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・修士 1 年生の前期に醸造学概論、後期に応用微生物学特講と、醸造学とその基本となる微生物学について重点的に科目を開設している。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・対面でのプレゼンテーション能力が鍛えられなかった。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・来年度は通常のポスター発表にオンラインのメリットを組み合わせた発表形式について検討をすることが望ましい。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	推薦入試を 5 月 20 日に適切公正に実施し、2 名が合格した。大学院 1 期入試および 2 期入試については、希望者を対象に事前に説明会を実施し、入試制度を説明すると共に、専攻の特色やアドミッションポリシーについて説明をした。アドミッションポリシーに即した基礎学力を評価するため生物化学（微生物に関すること）と英語を入試科目とし、公正に選抜を実施した。	志願者数及び研究科の定員（20 名）を考慮し、本年度合格人数は、26 名（推薦：2 名、1 期：18 名、2 期 6 名）とした。醸造学専攻として、英語と化学が基礎となるため、学生の受け入れの試験科目としては、従来と同じ、「英語」及び「生物化学（微生物に関すること）」が適切であるとしたが、よりよい試験科目の在り方について検討を予定している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・推薦入試では、高い GPA を基準とすることで、大学院進学を目指す学部生に対して GPA に対するインセンティブを明確にできた。 ・1 期入試および 2 期入試では、事前に説明会を実施することで、アドミッションポリシーを理解した受験生を集めることができた。	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・推薦入試では、出願資格の要件として GPA3.00 以上と高い基準を設定している。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・推薦入試については、学部生の学習意欲を高める効果をより生かすために、低学年次学生への積極的かつ適切な周知を行うことが望ましい。新学期のガイダンスなどでも紹介する。	【課題】 ・研究意欲のある学生に、他大学院よりも本専攻を選択してもらえるような指導を模索する。また、よりよい試験科目の在り方について検討する。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・東京農業大学の求める教員像、東京農業大学大学院農学研究科教員組織の編制方針に基づき、醸造学専攻教員組織の編制方針を策定している。	・醸造学専攻の主要科目である醸造微生物学、微生物工学、酒類生産科学、発酵食品科学、調味食品科学、醸造環境科学の各特論に指導教員を配置している。指導(准)教授は 10 名配置されており、十分な教育研究活動の展開が可能である。指導補助教員が 1 名と少なかったが、3 名が指導補助となる予定である。	醸造学専攻の教育・研究の将来計画に基づいて教員の募集、採用、昇格等を適切に行っている。 将来計画に基づき、教員 2 名体制の 2 研究室にそれぞれ新規採用教員が就任予定である。	教員の資質向上のための基盤づくりのための話し合いを行い、将来的な実施に取り組んでいる。	・研究室内の指導体制や教員組織体制について専攻内で議論している。学生からの聞き取り調査も行い、問題があれば対処できる体制をとっている。 ・大学院関連の会議報告や連絡を専攻会議だけでなく学科会議でも行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・教員 2 名体制の研究室が 1 つ残る。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・適宜、教員の募集と採用を行う。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学研究科（農学研究科）

学部長・研究科委員長名 山本 祐司（上原 万里子）

学科名・専攻名 食品安全健康学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	2020 年度に開設した博士前期課程および博士後期課程のカリキュラムは、文部科学省に届け出たものであり、カリキュラムポリシーに則って、食の安全と健康機能に関する問題解決力を身につけることのできる編成になっている。なお博士前期課程の新カリキュラムは、2018 年度からの旧カリキュラムを一部修正したものである。	英語論文購読という科目を設け、学生自ら英語論文を読み、理解し、教員、学生、院生の前で発表させている。また、食品関連分野の専門家を招き、最先端の情報、食品関連に興味を持つ情報を積極的に提供している。オンラインポスター発表会や修士論文発表会を通じて、発表を行うための準備方法、発表内容の構成力、分かりやすく伝えるプレゼンテーション力を身に付けさせた。	単位制度および学位授与は、1 年次の春にガイダンスを行い、学生全員に周知させている。各教員が担当科目に対して、シラバス上で評価の方法を記載し、それに則って単位認定を行っている。また、成績評価、単位認定について質問がある場合には、指導教授、専攻主任、専攻主事から説明している。	各科目において、進行過程で出席状況を、レポート等の提出により理解度を把握することで、必要に応じて適切な指導を行っている。また、科目の終了時には、プレゼンテーション等によって学習成果の達成度を把握し、適切な評価を行っている。	学期末に学生アンケートを実施し、その結果を各教員に配布し、次年度以降の授業に役立てるようにしている。さらに評価の低い項目については、各科目においても専攻全体としても改善措置を講じている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 現在、研究をするうえで重要な研究倫理を必修としている。また、食品科学分野の研究に必要であり、最先端の情報を取得、理解できるような編成にしている。また、自分の出した成果を他人に分かりやすく発表できるためのプレゼンテーションスキルについても学べるカリキュラムになっている。	【長所】 2021 年 12 月に行った、オンラインポスター発表会は全学的に実施したものであり、専門が異なる教員、院生はもちろん包括連携協定を締結している企業研究者にも研究内容を評価してもらい、専攻内で行うトレーニング以上にプレゼンテーション力をつけることができる。	【長所】 入学時のガイダンスでの説明により、終了に必要な 30 単位のうち、1 年次で概ね 20 単位を履修し、ほとんどの大学院生が単位を取得している。	【長所】 大学院では、学部と異なり、大学院生の人数が少ないため、様々な科目でレポート内容のプレゼンテーションやディスカッションなど、アクティブラーニングを導入している。	【長所】
	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】 昨年度に引き続き、学生アンケートで 80%以上の満足度を得た。今年度も引き続き、指導教授 2 人体制をとることで、大学院生にとって満足のいく指導体制の維持を試みた。

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】	【課題】	【課題】	【課題】
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	教務部学務課と協力して、入試説明会・大学ホームページ・大学案内等にてアドミッション・ポリシーを公開している。専攻の指導教員が全員参加して、教務部学務課の指導のもと、入学者選抜会議を開催し、専門科目や面接の結果を基にした入学者選抜を行っている。	昨年度に博士後期課程が開設されたため、その点検・評価は完成年度である次年度に行う予定である。ただし、既に完成年度を迎えた博士前期課程では、大学院生の受け入れの適切性について、年度末に点検・評価し、次年度の受け入れに活かせる取り組みとなっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】 推薦入試と一般入試（年 2 回）の両方を設けている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	開設時、教員組織の編成方針を作成した。大学および応用生物科学研究科の教育編成方針を踏まえ、本専攻の最大の特徴である「食の安全」と「食の健康機能」に関する能力育成、教育指導に対する姿勢を明示している。	当専攻の指導教員は10名（うち女性3名）、指導補助教員は4名（うち女性1名）となっている。教員が担当する授業数においては多すぎないよう、毎年度、見直すことで適切な配慮がなされている。10～20年後の専攻の教員構成状況を考慮し、各研究室の教員の年齢はバランスよく構成されている。	教員の職位ごとの募集、採用、昇任等は、学則に則って行っている。	新型コロナウイルス感染症禍であるものの、各種講習会がオンラインで開催されたため、大学で開催されるファカルティ・ディベロップメントの講演に学科の多くの教員が積極的に参加した。また、学生課が主催するハラスメント講習会にも多くの教員が参加している。	毎年度末に行われる自己点検・評価を全教員が各々行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】	【長所】 学則での明記はないが、指導教員でなかった教員が昇格した場合には、すぐに指導教員とはならず、指導補助教員として最低1年間は大学院生の指導にあたることにしている。	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】	【課題】	【課題】	【課題】
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学研究科（農学研究科）

学部長・研究科委員長名 山本 祐司（上原 万里子）

学科名・専攻名 食品栄養学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	前期課程では、公表している教育課程の編成・実施方針に記載された(1)、(2)、および(3)の各項目全ての授業科目を開設し、学位授与方針に掲げた能力を涵養している。後期課程は、公表している教育課程の編成・実施方針に記載された(1)の項目に記載された授業科目を開設し、学位授与方針に掲げた能力の向上に向けて適切に運用されている。	先端関連分野における外部機関所属研究者を招いた特別講義を開催し、研究の活性化を促進している。本年度も新型コロナウイルスの影響のため、例年より少ない講義開催数であった。	卒業・修了要件に関しては、学生便覧等に明示している。論文審査に関しては、修士は「公開審査会」及び合議制の「専攻内審査会」により審査を実施・承認している。博士学位論文審査は、必要な論文数を明示し、「公開審査会」並びに合議制の専攻内の「審査報告会」開催による審査を実施している。審査は「学位論文審査基準、評価方法及び最終評価」に基づき、審査結果は、研究科委員会で報告し、承認を受けている。	博士前期課程の学生には、教育・研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、総合的に(1)学力、(2)論理的思考、(3)問題解決能力および(4)コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を評価している。また、博士後期課程の学生は、研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、要求される(1)体系的知識と分析力、(2)問題解決に向けた指導的能力および(3)国際的な発信力を評価している。	シラバス内容を、専攻内のシラバス検討委員会で確認、検証を行い、教育の改善・向上に役立てている。また、授業評価アンケートの結果と改善策を教員間で共有している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	令和3年度大学院授業実施報告書、評価報告2021、◆専攻3ポリシー、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス	2021食品栄養学専攻特別講義一覧（資料1）	大学院学生便覧 2021、大学院農学研究科委員会議事録、◆学位論文審査基準、◆「公開審査会」並びに合議制の専攻内「審査報告会」の実施記録（資料2～8）、2021修了判定根拠資料（資料9）	◆学位授与方針に関する評価基準（資料10）、◆専攻内の「審査報告会」の実施記録（資料6～8）	2020F及び2020L授業評価報告書 ◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーとして、入学前の (1) 学習歴・学力水準、(2)、(3) 入学希望者に求める水準等の判定方法、(4) 能力を設定し、ホームページ上で適切に公開している。受験生募集は、インターネットなどにおいて学生の受け入れ方針を明示して実施している。入学者選抜制度は、学内推薦入試と学内外の受験生の公平性を担保したⅠ期とⅡ期の一般入試により適切に設定されている。入学者の選抜は、全ての入学試験において専攻内の研究指導教員より構成される入試選考委員による面接ならびにその後の専攻主任教授を委員長とする入試選考委員会の公正な審査を経て適切に行われている。	学内推薦入試とⅠ期とⅡ期の一般入試の入試選考委員会において、学生受け入れの適切性について、選考委員間で十分に議論している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻3ポリシー、◆大学院入試募集要項、HP等、◆入試選考委員会実施記録（資料11～14）	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	応用生物科学研究科・農学研究科および食品栄養学専攻の教員組織の編成方針は、本学のホームページ上に公開している。	教育上主要と認められる食品栄養学特論ならびに人間栄養学特論の必修の特論科目に関しては、指導教授ならびに指導准教授が担当している。また、柱科目である選択科目の特論科目に関しては、すべての科目に少なくとも 1 人以上の指導教授あるいは指導准教授が担当しているなど、適正な配置が行われている。	専攻における人事計画に沿って、「大学等の設置基準」をもとに適切な職位ごとの充足を行っている。また採用・昇格に関しては、東京農業大学教員資格審査マニュアルに則り「5 年以内の責任著者としての 3 報以上を有する」ことの実行など、厳格な運用が行われている。	前学期・後学期に実施される授業アンケートの結果を大学院担当教員に回覧することで共有し、そこから問題点を抽出、適切な改善計画の策定を行ったうえで、適切に実施している。	教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに取りまとめて、次年度以降の活動の意識付けをしている。また、専攻会議において、教員組織の適切性について、専攻教員配置表等を元に、適宜、検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・「5 年以内の責任著者として最低 3 報」をコンスタントに維持することが難しい。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・中長期の人事計画のみならず組織改革など突発的な事象にも対応可能な論文作成計画を立案する。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 15）、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 15）、◆専攻人事計画書（資料 16）、◆教務職員資格審査基準及び関連書類	2021F 及び 2021L 授業評価報告書 ◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 15）、◆専攻人事計画書（資料 16）、◆教務職員資格審査基準及び関連書類、2021 研究活動報告（資料 17）

学部・研究科名 応用生物科学研究科（農学研究科）
長・研究科委員長名 山本 祐司（上原 万里子）
学科名・専攻名 農芸化学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農芸化学学問領域の体系的教育の実施と学生の質の向上 1) 広範な知識の効率的学習支援 2) プレゼンテーション能力向上		
実行サイクル	1 年サイクル（令和 2年～ 2年）	年サイクル（平成 年～ 年）	年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	1) 様々な観点から農芸化学領域に関する知識を得るための大学院 特別講義の開催 2) 外部講師によるプレゼンテーション講習会 3) 大学院研究成果中間発表会（M1）の定期的な実施		
目標達成を測 定する指標	1) 講義出席・レポート作成状況を把握する 2) 教員、大学院生間の成果発表会の内容審査を集計し、表彰する		
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院特別講義の実施。プレゼンテーション講習会の実施。 大学主催の大学院生発表会での該当学生の発表、並びに専攻主催の M1 対象の中間発表会及び M2 対象の修論発表会の開催。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 なし	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 プレゼン講習の外部委託は経費の負担が大きい	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 プレゼン講習の見直し。	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院生が関わる研究活動の活性化と研究成果発信の推進		
実行サイクル	____1____年サイクル（平成 3 1 年～ 3 1 年）	____年サイクル（平成 年～ 年）	____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	1）指導教員との定期的な研究内容の打合せ、ゼミの充実 2）国内外で開催される関連学会への参加・成果発表、論文発表		
目標達成を測 定する指標	大学院生が関わる研究成果の学会発表数と投稿論文数を継続調査する。		
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学術論文 23 報、学会発表 123 件		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 なし	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 継続的な調査	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院「農芸化学専攻」受験者数の増加		
実行サイクル	1 年サイクル（平成 3 1 年～ 3 1 年）	年サイクル（平成 年～ 年）	年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	HP と入試説明会などで「農芸化学専攻」を広くアピールする		
目標達成を測 定する指標	大学院「農芸化学専攻」受験者数を集計、継続調査を行う。		
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	2022 年度博士前期課程へは、志願者 40 名、入学者 37 名となり、昨年度と比較して、志願者は横ばい、入学者は 7 名増であった。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 なし	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 なし	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学研究科（農学研究科）
学部長・研究科委員長名 山本 祐司（上原 万里子）
学科名・専攻名 醸造学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	醸造微生物学、微生物工学、酒類生産科学、発酵食品化学、調味食品科学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を通じて、各専門分野における確かな知識と技術を修得する。	プレゼンテーション法を通じて口頭発表を行う能力を高める。	博士後期課程への進学者を確保する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 2 年～令和 3 年）	1 年サイクル（令和 2 年～令和 3 年）	1 年サイクル（令和 2 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	醸造微生物学、微生物工学、酒類生産科学、発酵食品化学、調味食品科学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を実施するとともに、最新の知見、技術の導入により内容の充実化を図る。	博士前期課程 2 年の学生を対象に中間発表会(ポスター形式)および最終発表会(口頭発表)を実施する。また、大学院全体で開催されるポスター発表会への参加を促す。	醸造学専攻特別講義を 1 年間に 2 回開催し、研究職の魅力をアピールする。
目標達成を測定する指標	専攻内の研究発表、学会発表、就職状況から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。	ポスターおよびスライドの完成度、プレゼンテーション技術、質疑応答の状況から総合的に判断する。	博士後期課程進学者数から評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	・専攻内の中間発表会や最終発表会の内容は十分に高いレベルであり、また就職状況も、醸造関連から化学系の企業まで幅広い企業に就職していることから、特論科目を実施する中で、最新の知見と技術を修得できたと判断した。	・博士前期課程 2 年生について、オンラインでのポスター発表会と口頭発表会（最終発表会）を行い、活発な質疑応答がなされた。また両発表会の準備として各研究室でプレゼンテーションを指導した。	・博士後期課程への進学者を 3 名確保することができた。コロナ感染防止のために、特別講義開催の日程調整が難しく、実施することができなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科と専攻において最新の分析機器を運用することで、新しい技術の修得にも力を入れている。	【長所】 ・ポスター発表会を Microsoft Teams を利用して実施し、質疑応答に数日間の時間を設けたため、活発な質疑応答がなされた。	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・対面でのプレゼンテーションの機会が無かった。	【問題点】 ・オンラインによる醸造学専攻特別講義の実施実績がない。
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし。	【課題】 ・研究職の魅力をアピールする方法として、特別講義以外の方法について検討が必要。Zoom を利用した方法も検討する。
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学科・専攻共通機器の効果的運営のための基盤整備	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（平成 30 年～令和 4 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 2 年～令和 3 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 2 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	ワーキンググループを立ち上げ、学科・専攻共通機器を運営するためのルールを策定する。策定したルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	ルールを策定し、既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。	・学会発表は、専攻で年間 20 件以上を目標とする。 ・外部資金申請は、専攻で年間 5 件を目標とする。 ・できる限り Impact Factor (IF) の高い雑誌への投稿を行なう。	専攻全体として、年間 5 件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	共通機器の精米機を複数の研究室で利用している。共通機器である GC/MS, LC/MS を担当研究室の管理のもと運用している。学部共通機器について担当者を決め、運用等についての情報を共有している。	・学会発表数は専攻で 26 件と昨年度より 11 件増加し、目標を達成した。論文発表数は 20 件であった。外部資金申請は本年度 20 件で昨年度よりも 10 件増加し、目標も達成した。Impact Factor が高い（4.223, 5.640, 5.640, 5.640, 5.816, 7.17, 9.642）雑誌への投稿と受理がされた。	・公的機関、企業との共同研究が 62 件あり、十分に達成していると考えられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・共通機器を特定研究室が管理することで大きな故障等を起こさずに運用できている。	【長所】 ・IF が 4 以上の雑誌での論文受理数が 5 件増え、7 件であった。	【長所】 ・各研究室が、それぞれの担当領域に応じた適切な連携を行なっている。
	【特色】 ・これまでに明らかにされていない醸造物中の新規な成分の発見につながる。	【特色】 ・発酵・醸造分野においてレベルの高い研究を実施できており、各研究室で活発な研究発表と論文発表が行われている。	【特色】 ・醸造関連企業との連携のみならず、地域活性化に関わる共同研究を実施している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・各教員の研究時間の確保が難しく、全ての研究室にて運用できていない。特定管理者のみの留まらずワーキンググループを積極的に活用していく必要がある。	【問題点】 ・教員の研究時間の確保が難しい。	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・将来的な共通機器購入のための継続した話し合いも必要である。	【課題】 ・英語の学術論文への投稿を増やし、引き続き論文投稿を継続していく。また、研究成果の発表および外部資金の獲得を積極的に行なう。	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学研究科（農学研究科）
学部長・研究科委員長名 山本 祐司（上原 万里子）
学科名・専攻名 食品安全健康学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	プレゼンテーション能力を高める
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）
実施 スケジュール	1. 学会での発表を積極的に行う。 2. 大学内におけるポスター発表会でのポスター作製、ポスターを用いた質疑応答を行う。
目標達成を測定する指標	1. 大学院生の学会での発表数を確認する。 2. ポスター発表会での発表数を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 大学院生の学会発表数は 50 件であった。 2. 修士 2 年生 17 名全員がポスター発表をした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】
	【特色】 今年度は、新型コロナ感染症禍のため、開催される学会がオンラインなどでの開催が多かったことで参加する数居が低かったためか、大学院生による発表が昨年度に比べて倍増した。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】
	【課題】
根拠資料名	

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	食品安全健康学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。	様々な研究助成などからの外部資金の取得を試み、研究活動の推進につなげる。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）
実施 スケジュール	1. 食品安全健康分野に関連する国内外の学会で発表する。 2. 食品安全健康分野に関連する和文誌、国際誌に投稿する。	外部資金獲得のために科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに応募する。
目標達成を測定する 指標	1. 学会発表数を確認する。 2. 学術論文掲載数を確認する。	外部資金の申請数を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 学会発表数は 73 件であった。 2. 掲載論文数は 39 件であった。	本年度は科学研究助成費を含め 25 件の応募をし、10 件の資金を獲得できた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 昨年度は新型コロナ感染症禍のため中止された学会の多くがオンラインで開催されたため、学会発表数が増加したと考えている。	【長所】
	【特色】 昨年度は新型コロナ感染症禍のため中止された学会の多くがオンライン開催され、学会発表数が増加した。	【特色】 例年通りの申請数であったと考える。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度へ の課題	【問題点】 本年度は、新型コロナ感染症禍で中止していた業務が再開され、研究する時間は確保できたものの論文を作成する時間が減少し、掲載論文数が昨年度と比べて減少した。	【問題点】 研究活動の推進にさらにつなげるためには、申請するだけでなく、より外部資金を獲得できるようにすることが必要である。
	【課題】 通常業務を継続しながら、論文を作成する時間が確保されていない可能性がある。	【課題】 申請書等のレベルを上げるよう、学内で開催される獲得に関するセミナーに積極的に参加する。また学内で申請書の内容をチェックするシステムがあるため、そういった機会を利用する必要がある。
根拠資料名		

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	受験者数の増加を図る。	今後の食品企業では、安全・安心という「守り」と、機能性食品などの新たな市場への「攻め」のそれぞれに対応できる、攻守のバランスのとれた人材が求められているといえる。また行政にとっても、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、ますます多様化する機能性食品あるいは機能性表示食品市場を規制する取り組みが必要で、やはり同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本専攻のディプロマーポリシーにある「食品安全健康学専攻は、食品の『安全性』と『機能性』の両分野において、問題解決力を身につけた研究者や高度な専門職業人を輩出する」専攻であることを広く食品企業等関連業界に周知させる。
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）
実施 スケジュール	1. 食品安全健康学科学生に対して、講義等を通じて、研究の意義、研究職の魅力をアピールする。 2. 食品安全健康学科学生に対して、毎年、大学院での研究、研究職の魅力などについて、学期最初に行われるガイダンスなどを通じて PR する。	1. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科 PR を行う。
目標達成を測定する指標	1. 令和 2 年度食品安全健康学専攻受験者数を確認する。 2. 専攻説明会の回数、参加人数を確認する。	1. 参加学会懇親会数を確認する。 2. 問い合わせを受けた企業数を確認する
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 博士前期課程の志望者は 26 名、博士後期課程は 2 名であり、博士前後期課程あわせて 28 名の受験生が試験を受けた。 2. 学科内学生のための説明会（1 回）も含め、説明会を計 3 回行い、計 25 名の学生が参加した。	1. 8 件の懇親会・交流会に参加した。 2. 問い合わせを受けた企業は 52 件であった。 また、大学主催の企業懇談会に教員が参加し、1 人あたり 3～5 社の企業に挨拶し、本専攻の特徴等について説明した。またメディアからの問い合わせも 12 件あった（うち 11 件が各種媒体に掲載）。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】 問い合わせ企業数は昨年とほぼ同レベルであったものの、委託研究（共同研究）数は昨年度よりも増え、本年度は 41 件であった。引き続き、魅力ある学科・専攻として、様々な手法を用いてアピールしていきたい。また、メディアからの問い合わせも多くなってきている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 受験生数が伸びていない。	【問題点】 今年度、学会開催数は増えたものの、ほとんどがオンラインであったため、懇親会等が開催されず、食品企業等関連業界に周知することが困難であった。
	【課題】 これまでは、大学院に関する説明を大学入学時の学生およびその保護者にも行ってきたが、昨年度に続き、本年度も新型コロナウイルス感染症禍のため、保護者への説明は充分できなかった。大学院入試説明会では、4 年生が中心であったものの、2～3 年生の聴講者も少なくなかったため、今後、様々な機会に大学院に関する説明を行い、受験生数を伸ばしていく必要がある。	【課題】 来年度、学会が対面形式で開催されるようになれば、懇親会等も開催されと考えられるため、学会へ積極的に参加し、懇親会等での PR 活動の機会を最大限に活かすことが必要である。
根拠資料名		

学部・研究科名 応用生物科学研究科（農学研究科）
学部長・研究科委員長名 山本 祐司（上原 万里子）
学科名・専攻名 食品栄養学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	教育の可視化を図るため、カリキュラムポリシーに沿って体系化されたカリキュラムを構築する。
実行サイクル	3 年サイクル（令和 2 年～ 4 年）
実施 スケジュール	本専攻におけるカリキュラムポリシーを達成するため、「食品栄養学特論」と「人間栄養学特論」を必修科目として配することで、初期の段階での食品栄養学の幅広い専門的基礎知識や技術、研究手法を主体的に修得することを可能にするとともに、「食品栄養学特別演習」、「食品栄養学特別実験」をⅠ～Ⅳに細分化して段階的に目標を定めて実施することで論文作成プログラムの体系化を進め、教育の可視化を図る。
目標達成を測定する指標	(1) シラバスへのアクセス数（在籍者 1 人当たりのシラバスアクセス数も導入）を現状との比較により確認する。 (2) 学生による授業アンケート結果により評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	博士前期課程科目に対する学内アクセス数は 1～32 であった。本専攻は、博士前期課程の定員が少なく、各年度間における博士前期課程の学生数の変動が大きい。そのため、適切に行うことが難しいと考えられる。2021 年度前学期の授業アンケートの結果、「そう思う」、「ややそう思う」という回答の比率が高く、当該カリキュラムが肯定的に捉えられていると考えられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・目標達成を測定する指標（1）においては、在籍者数に変動すると考えられ、正確な指標とは言いにくい。
	【課題】 ・目標達成を測定する指標（1）については、「1 人当たりのシラバスアクセス数」等により適切な指標を示す必要がある。
根拠資料名	◆シラバスアクセス数（資料 18）、◆授業アンケート結果

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の獲得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（令和 3 年～ ____ 年）
実施 スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会に参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌に投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測定する指標	達成度を判断するための指標としては、 (1) 教員の学会発表演題数 (2) 学術論文掲載数 (3) 外部資金への申請数 などを確認し評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	各教員の学会発表演題数、学術論文掲載数、外部資金への申請数は一定数認められたことから、研究活動が適切に推し進められている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	2021 研究活動報告（資料 17）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	学部からの研究継続による専攻の研究力向上と大学院における入学定員を十分に確保するために内部進学率の向上を目指す。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～ 年）
実施 スケジュール	(1) 学内推薦入試を実施する。 (2) 大学院特別講義への学部生の参加を促すことで、研究に対する意識付けに繋げる。 (3) 卒業論文研究への早期着手による大学院進学への意識付けを積極的に行う。
目標達成を測 定する指標	(1) 大学院特別講義への学部生参加者数により評価する。 (2) 内部進学生により評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学内推薦入試では、3名の応募者があった。専攻内会議において、令和4年度推薦入試の応募要件などを再検討し、次年度もGPA2.70（現行GPA2.70）以上の条件で行うこととした。大学院特別講義への学部生の参加は一定数認められ、研究に関する意識付けは部分的になされたと考えられた。また、全学的な取り組みである大学院生のポスター発表会への学部学生の参加を促したところ、一定数の学生の参加が認められた。本年度の受験者数・内部進学者数は昨年度よりも増加し、合格者数は入学定員を満たした。卒業論文研究への早期着手に関しては、各研究室の事情などにより、ばらつきがあった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・卒業論文研究への早期着手は、各研究室にばらつきがあった。
	【課題】 ・卒業論文研究への早期着手に向けて各研究室は努力する。
根拠資料名	2019 食品栄養学専攻特別講義一覧（資料 1）、◆内部進学者数、進学者数等、◆専攻会議での検討を示す議事録・資料（資料 19）